複合名詞に見る日本語アクセントの統語機能
―日本語と厦門語の比較研究

愛知学院大学外国人教師　朱新建

キーワード：　複合名詞　アクセント核　声調　変調　統語機能

一般にアクセントや声調は意味を弁別する機能が重要視されているのに対して、その統語機能は見落しがちである。日本語のアクセントは、複合名詞のアクセントにおいては、弁別機能よりも、統語機能のほうが重要な役割を果たしていると考える。一方、弁別機能においては日本語のそれよりは重要であるが、中国語厦門方言の声調は、弁別機能のほかに統語機能の働きも大きい。本発表では、アクセントや声調の統語機能に焦点をあてて、日本語と厦門語を比較対照し、アクセントと声調は本来の弁別機能のほかに、構文的に統語機能がより重要であることを明らかにしたい。

a.　中華(ちゅうか)①＋料理(りょうり)①→中華料理(ちゅうかりょうり)・　　（①などは前から、・・などは後ろから１拍

b.　中華(ちゅうか)①＋思想(しそう)・→中華思想(ちゅうかしそう)・　　ずつ数えるアクセントの核。・は無核。）

c.　中華(ちゅうか)①＋人民(じんみん)③＋共和国(きょうわこく)・(造語)→中華人民共和国(ちゅうかじんみんきょうわこく)・

d.　中華(ちゅうか)①＋風(ふう)(造語)→中華風(ちゅうかふう)・

上の例はいずれも前部名詞と後部要素構成の複合名詞であるが、前部名詞のアクセントは後部要素結合によって失い、複合名詞全体に新しいアクセントが付与された。これはアクセントの一種の変調(Sandhi)とも言えるようなものである。複合名詞は拍数が多い場合、アクセント核を前から数えるより後ろから数えやすいので、伝統表記の①、④などより、・・のような表記を提案した(朱 1994)。日本語のアクセントは有核か無核かに分かれるが、有核の場合、一語にアクセント核は二箇所に分かれて存在しないのが規則である。複合名詞は付与された新しいアクセントによって一語であると認識され、この新しいアクセントが即ちアクセントの統語機能である。複合名詞のように、音節（拍、モーラ)が多ければ多いほど、それだけでも言葉の意味が限定されるようになり、アクセントは自然にその弁別機能が弱まり、統語機能が強まるわけである。複合名詞のアクセントは後部要素によって決まり、前部名詞は何拍、何語であっても本来のアクセントがなくなるため、一般名詞のアクセントと比べるとより規則的である。後部要素は１音節語(特殊拍を含む)で、有核の語では・型が多い。なごや①＋し(造語)→なごやし・(名古屋市)、ペキン①＋し→ぺきんし・(北京市。「－市」のアクセントは「―し」の直前に特殊拍でもアクセント核がくる独立性のある語である)。後部要素は２音節以上の語で、a.c.のように有核の語はアクセント核がいきるが、b.のように無核の語では後部の第１音節にアクセント核が付与される。あいち①＋ばんぱく・→あいちばんぱく④（愛知万博)、せいか①＋だいがく・→せいかだいがく④(清華大学)。この法則はひいては複合語全体に適応できる。

一方、中国語で最も古い方言といわれる閩南方言の一つである厦門方言では、ほとんどの音節（漢字）が本調(Basic Form)と変調(Sandhi)を合わせ持ち、そして複合名詞の場合は、最後の音節（漢字）が本調を保持し、前の音節(漢字)はほとんどすべて変調する声調

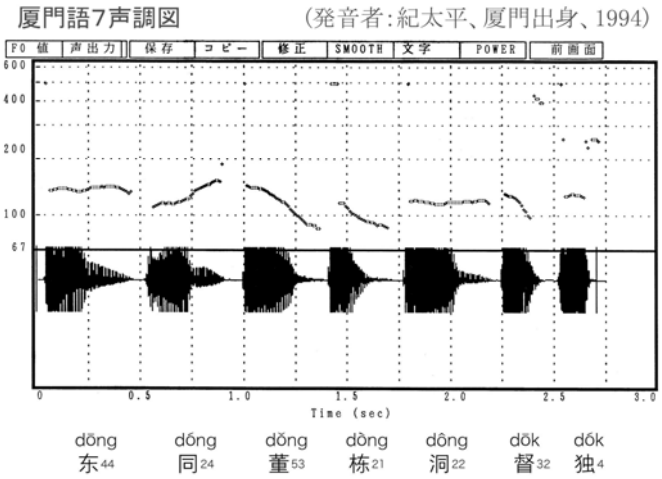
交代が起きる。

tsia・　tsiu　tsia　tsiu
A. 食 4＋酒53→食21酒53(酒を飲む)

tsu　tsia・　tsu　tsia・
B.煮53＋ 食 4→煮44 食 4(三食を作る)

hi　kuan　hi　kuan
C.戏21＋ 馆53→戏53馆53(劇場)

kua　a　hi　kua　a　hi
D.歌44＋仔53＋戏21→歌33仔44戏21



(厦門の伝統芸能の一つ)(4,53などは厦門語の声調調値)

厦門語7声調図のように、厦門語の声調は本調7種類、変調も7種類、調値が同じものを除いても本調＋変調は10種類がある(朱 1994)。厦門語の声調調類(本調・変調):

第一声:陰平半高平調,調値44,第三声の変調。
第二声:陽平中昇り調,調値24,
第三声:陰上高降り調,調値53,
第四声:陰去低降り調,調値21,第五声の変調。
第五声:陽去低平ら調,調値22,
第六声:陰入中降短促調,調値32,
第七声:陽入半高短促調,調値4,第六声の変調。
第八声:陽去中高平調,調値33,第一声第二声の変調。
第九声:陰上半高降調,調値32,第四声の変調。
第十声:陰去低降短促調,調値21,第七声の変調。

厦門語の辞書では、二字以上の熟語の場合、前部名詞の声調は本調と変調が同時表記になっていることから見ても、変調がいかに一般的であるかが分かる。中国語は声調の種類によって弁別機能が働くが、厦門語のように常時に変調すると、自然に弁別機能が弱まるため統語機能が働いて相補う。後部要素の声調が保持し、前部の声調が変調する点では、日本語の複合名詞の場合と共通するところである。

このほかに、日本語の複合名詞では、動詞的な働きのある名詞が存在する場合、一語として看做さずに、新しいアクセントによって統語されない。こうむ①＋しっこう・＋ぼうがい・→こうむ①しっこうぼうがい・(公務執行妨害)。これは「公務を執行妨害する」というような意味で、名詞句と考えられる(早田 1999)。厦門語も、名詞でない熟語、例えば主語と述語の組み合わせの語は変調しない。gua　ai　tsia・　gua　ai　tsia・我53＋爱21＋ 食 4→我53＋爱53＋ 食 4。そして、厦門語も北京語と同じように軽声がある。軽声のある単語は声調であると同時にストレスアクセントでもある(早田 1999)。厦門語の声調は軽声の場合も変調しない。

sai　si　sai　si　lau　k‘i　lau　k‘i　ua　ts‘u　ua　ts‘u
西44＋勢→西44勢(西方)、老22＋ 去 →老22 去 (死去)、何35＋ 厝 →何35 厝 (厦門の地名)

アクセント(日本語、英語など)はどこに位置するかを問題にするが、声調はどの種類であるかが問題になる。中国語は音節声調言語であり、日本語は単語声調言語であるが、「声調という述語を音節のみが担うものと限定しなければ、日本語の声調は漢語 (漢民族の言語)をはじめとする中国の種々の言語・方言とも比較できることになる」(早田輝洋 1999)。これからも日中言語の比較研究がいっそう期待されることであろう。

参考文献

朱新建、1994、『厦門語と日本語アクセントに関する一考察』、愛知学院大学教養部紀要第42巻第1号
早田輝洋、1999.2、『音調のタイポロジー』、大修館